

第15期 第6回小平市緑化推進委員会 会議要旨

- 開催日時 平成29年8月7日（月）午後6時30分～午後8時30分
- 開催場所 健康センター 4階 第2～第4会議室
- 出席者 椎名委員長、山田副委員長、森田委員、市川委員、信山委員、田中委員
白井委員、加藤委員、菊地委員、小林委員、棚井委員、千葉委員、西成委員
（順不同）
- 傍聴人 0名
- 議題 (1) 第15期小平市緑化推進委員会の検討課題について
(2) その他
- 配付資料 (1) 第15期緑化推進計画提言 たたき台2
(2) 小平市小学校・中学校の校歌から見えてくる学業と緑化推進の道のり
(3) 「小平観光まちづくりに関する基礎調査報告書」抜粋

会議の要旨

まず、事務局より資料（3）「小平観光まちづくりに関わる基礎調査報告」抜粋について説明があった。

説明後、次のとおり質疑があった。

委員

設備の要望について、トイレに対する要望が減少傾向であるが、平成12年から平成24年の間でトイレの数は増加したのか。

事務局

グリーンロード沿いにおいてトイレの数は、平成12年から平成24年の間で増えてはいない。看板や案内の増加によりトイレの場所の認知度が増したことで、要望数が減少したのではないかと考えられる。

委員長

左岸と右岸の交通量の違いは何か。左岸では自転車の交通量が10倍にまで増えている。

事務局

道路形態の違いや、玉川上水左岸側に学校が集中していることが、兩岸の交通量の違いに影響していると考えられる。

委員長

このような調査は5年に1度はやったほうがよい。平成24年から平成29年間でも変わってくると思われる。

委員

玉川上水緑道は自転車を乗り入れてよいのか。

事務局

緑道は歩道に準じた扱いとなっているので、原則自転車の通行は車道となっているが、車道の状況により自転車の通行が危険な場合は、歩行者の安全を確保した上で、緑道に乗り入れてよいということになっている。

委員

玉川上水緑道は、生活道路としての側面もあるので、自転車を排除するのには無理がある。歩け歩け運動の影響もあり、歩行者も増加しているが、その反面、緑道の土壌が固くなり植生に影響が出てきている。何かうまい方法はないか。

委員

玉川上水緑道は場所によって、冬場は霜がおりるので、ぬかるみができ、歩きにくくなるのも課題ではないか。樹木が根上りし、歩きにくい場所もある。

委員長

「プチ田舎」という観点では、霜がおりる風土を知るというのも良いのではないかと。樹木の根上りもあるが、その上を歩いても樹木にはあまり問題ない。

生活道路としては、イマイチかもしれないが、逆に舗装すると自転車の通行量はもっと増加してくる。不便かもしれないが、自然があるというのがグリーンロードの趣旨ではないか。

委員

グリーンロードの通勤、通学での利用者が増加傾向にある。これからのグリーンロードの利用目的を考えなければならない。

委員長

単純に生徒数や、事業所の数が増えたことも考えられる。通行する利用形態が二重構造になっているのではないか。例えば、雨の日は舗装道路を通り、晴れた気持ちの良い日はグリーンロードの緑道を通るなど。

委員

グリーンロードのなかには多摩湖自転車道があり、サイクリングロードとなっているところもあるが。

委員長

グリーンロードのすべてが同じ形態でなくてよい。そのなかでどのように緑を表現していくか。例えば、同じAという地点からBという地点に行くときに、グリーンロードを通りたくなるようにしていくことではないか。

委員

緑化としていい方向へ改良していくべき。環境の整備が不十分で、樹木が枯れてしまうことも考えなければならない。

委員長

色々な矛盾があるなかでうまい方法をみつけていくべき。

続いて、委員より資料（2）「小平市小学校・中学校の校歌から見えてくる学業と緑化推進の道のり」について説明があった。

説明後、次のとおり質疑があった。

委員

ビオトープのある学校はどのくらいあるか。

委員

おそらく半数くらいはあるが、それが活かされてるかどうか。先生や学校のやり方によってもだいぶ変わってくる。花壇づくりについては先生と生徒が一緒にやっている学校が多くある。

委員

街なかの緑がなくなってきていて、残されるのは公共の緑になる。学校はその拠点となるので、学校の緑は守らなければならない。東久留米では、屋敷林もまだまだあるが、小平ではほとんどがなくなってしまった。記念植栽も思いつきではなく、意図

的な植栽が求められる。

委員

植栽ということ言えば、「どんぐりの里親制度」がある。このような試みは、子どもが大人になっても、自分が育てた木に関心をもってもらえる。こうした活動の積み重ねによって緑化は進んでいくと思われる。

委員長

学校教育＋地域緑化が必要になってくる。青梅街道や五日市街道の街道沿いは、土地利用を考えれば、開発により樹木がなくなっていくことになるのは避けられない。

委員

校章に使われている樹木について、学校の先生もあまり詳しく知らない。もっと興味をもってもらえるにはどうしたらよいか。

校歌については、富士山や武蔵野という言葉が多く使われているが、今では富士山が見えるところも少ない。

委員長

富士山が見えるような道を残すという計画もあるのではないか。浮世絵の玉川上水には富士山も描かれている。

続いて、委員より野菜売り場について提案があった。

説明後、次のとおり質疑があった。

委員長

やりたい人はいると思うが、商売として成り立つかどうか。地産地消で小平の農業を守っていくのはもちろんだが、それで農家が生計を立てられるか。マーケットの問題。ビジネスチャンスが生まれるかどうか。制度なども必要になるかもしれない。

委員

農協より直売所の方が値段が安く買えるが、無人だとお金の管理が難しい。

委員長

農協では小平市内の直売所で売っていないものまで扱っているのです、そこと比較してビジネスチャンスがあるかどうか。

委員

グリーンロード沿いに直売所は少ない。地元住民しか知らないところがほとんどである。

委員

直売所で買うのはタイミングが難しく、買うのは地元住民がほとんど。販売情報などがわかるようになればよいのだが。

委員長

グリーンロード沿いでやるというのはおもしろいかもしれない。売り場を作って、参加者を募集する。民活でもよいかもしれない。「グリーンロードを歩けば新鮮な野菜が手に入る」というキャッチフレーズでやるのはおもしろい。

委員

玉川上水駅から鷹の台駅にかけて、直売所はほとんどない。小平ではなく立川にお金が流れているのではないか。

委員

新堀用水があるのでつくるのは難しい。玉川上水沿いとなると公園を利用するしかないのではないか。

委員

場所の問題もあるが、どれくらい売れるかを考える必要がある。

委員長

グリーンロード沿いの直売所の現況はどうか。

事務局

小平、花小金井間の狭山・境緑道では、8軒ほど直売所がある。小平では共選制度がないため、農家は競争状態にある。多種少数を自分の直売所で販売しているため、直売会などに入りたがらない傾向にある。狭山・境緑道周辺の直売所では、1日の売上は1万円から1万5千円程度。

委員

個の農家の特色を活かして、情報を拡散していく努力もしていくべきではないか。例えば、「とうもろこしは小平で一番早い」、「小平でアスパラが買える」などの情報を小平市内全体に広がるようにすればもっと買う人は増えてくるのではないか。

委員長

畑売りの野菜はおいしいというような情報を広めていくことで買う人も増えてくるかもしれない。

続いて、委員長より、資料（１）「第１５期第６回緑化推進計画提言 たたき台２」について説明があった。

説明後、次のとおり質疑があった。

委員

２０２０年、東京オリンピックのマラソンコースに街路樹を植えて、コースに木陰をつくるという計画がある。この流れを受けて小平でも目に見える緑化が何かできないか。

委員長

都としても夏の開催に合わせて、夏の花を植えるということがあるかもしれない。それに便乗して何かやる流れがあればよいが。

以上